

僕はリノ。僕たちの住んでいる町では、誰もが皆生まれた時からキグルミを着ている。

それこそ、赤ちゃんからお年寄りまで皆だ。キグルミは僕等の生活の一部なんだ。

そしてこのキグルミだけど、同じものを着ている人は誰一人として居ない。たとえば僕が着ているのは焦げ茶色の狼のキグルミだし、お母さんは三毛猫のキグルミ。お父さんは金色の虎のキグルミで、友達のパコなんかは緑色の怪獣のキグルミを着ている。だから町は色々な色のキグルミでいっぱいなんだ。

キグルミで一杯なこの町だけど、僕は今まで違和感を感じたことなんて無かった。僕が違和感を初めて感じたのはつい最近。小学校の僕のクラスに転校生が来た時だった。

僕はこれから、ちよつとした冒険を話そうと思う。僕と、転校生との…

僕が小学二年生になった頃、クラスに転校生が来た。転校生が来るっていうんで、学校ではちよつとした騒ぎになった。この町には学校は一つしかなく、転校生がくるということとはこの町の外からやって来るということ。この町は、滅多に町の外から人がやって来ない町なので騒ぎになるのは当然だった。少なくとも僕は、この町の外からやって来た人を見たことがなかった。

僕が初めて見た町の外からやって来た子、転校生のその子はチルという。僕にはチルを見てびっくりしたことがある。チルがキグルミを着ていないことだ。キグルミを着ていない人を、僕は見たことがなかったから。僕らにとって、キグルミは当たり前のもものだったから。だから僕はチルに質問したんだ。「どうしてキグルミを着ていないの？」って。そうしたら「じゃあ、どうしてキグルミを着ているの？」と聞き返された。理由なんて分から

なかったし、知らなかった。だから口ごもった僕に、チルは「変なの」と言って笑った。これが僕とチルの出会いだ。

僕はそれ以来、どういうわけなのかすっかり意気投合し、一緒に遊ぶようになった。それと同時に僕は町の外を知ることになった。そうしたら、僕らがキグルミを着ていることに疑問を抱くようになった。チルが、外の世界にはキグルミを着て生活している人は居ないと教えてくれたから。

「ねえ、リノたちはいつからキグルミを着ているの？」

チルにこう聞かれた。今思えば、これが僕とチルの小さな冒険の始まりだった。

「え、いつって、生まれた時からだよ」

「それって、お母さんのお腹から出てきた瞬間にはもうキグルミを着てたってこと？それとも、赤ちゃんの時に親が着せたの？」

「え、どういうこと？」

僕にはよく分からなかった。

「ほら、君たちって同じキグルミを着ている人は居ないじゃん。それって誰が決めてるんだろうって。…リノは気にならないの？」

「言われてみれば、確かに。そんなこと、考えたこともなかったよ」

「やっぱり、リノって変なの」

クスクス笑うチルを見て、チルの方がよっぽど変だと思った。

「じゃあ、リノたちがキグルミを着てる理由を探してみようよ」

外から来たチルは、この町の当たり前が不思議でしようがないようだった。チルが不思議だと思ふことは僕が考えたこともないものばかりで、それは聞いてみると確かに不思議で不自然なものが多かった。僕らがキグルミを着ている理由なんてその最たるものだと思う。だから、

「うん、探そう」

こう返事をした。

「でも、どうやって探したらいいんだろうか。リノはどう思う？」

「本で調べるとか？」

「うん、でも、それだとどんな本に載ってるか全然分からないし…」

「人に聞くのは？お年寄りとか」

「それでもいいけど、知ってそうな人居るの？」

「うん。僕のお婆ちゃんなんだけど、町のことには詳しいんだってお母さんが言った」

僕のお婆ちゃんは魔女と呼ばれている。カラスのキグルミを着た僕のお婆ちゃん。お母さんはすごく頭のいい人なんだよって教えてくれた。

「じゃあ、リノのお婆ちゃんに会いに行こうよ。どこに住んでるの？」

「ここからわりと近くに」

「なら今から行こうよ」

「うん」

そう返事をしたのはいいけれど、僕は今まで一人でお婆ちゃんの家まで行ったことはなかった。ちよつと不安だったけど、いつもお母さんと一緒に行くし平気だろうと思ひ、チルとお婆ちゃんの家を目指して歩き始めた。この判断が間違っていたと気がついたのはチルと二人で道に迷ってからだった。

空高く昇っていた太陽も、今では傾き、青い空は赤へ変わり、今では紫色になっている。

薄くて猫の爪みたいに細い三日月が僕たちを見下ろしていた。自分達の影は街灯の光で長くのびて、それが誰かに後をつけられているようですごく怖かった。

「ごめんね、チル」

僕はチルに謝った。怖かったし、不安で今にも泣きだしそうだった。

「いいよ、大丈夫だよ」

チルの方が不安だろうに優しく笑って、僕を励ましてくれた。

「ごめんね、ごめんね」

それがどうしようもないくらい申し訳なくって、僕には謝ることしかできなかった。

突然、チルは僕の手をきゅっと握った。僕がびっくりしてチルの方を見ると、

「手をつないで行こう？」

って、どこか照れくさそうにそう言って笑った。

「うん。ありがとう」

僕はお礼を言った。僕の手を握ってくれたチルの手はとっても温かかった。

それからしばらく、僕たちは手をつないで町をさ迷った。いくら歩いてもお婆ちゃんの家にはつかない。やっぱり不安だった。けど、チルがいるからもうそんなに怖くはなかった。

「やっぱり、迷っちゃったんだねえ」

突然正面から声が聞こえた。長くのびた影は鳥の形をしていて…

「お婆ちゃん！」

なんと、お婆ちゃんが迎えに来てくれたのだ。

「どうして分かったの。何も言わないで来たのに」

「リノちゃんが、お友達を連れてうちに来る気がしたんだよ」

そう言って、お婆ちゃんは優しく笑った。

「そっちがリノちゃんのお友達だね？」

お婆ちゃんはチルの方を見てそう言った。

「はい。チルといいます」

「そう、チルちゃん。外から来た子なんだね？」

「はい」

「そうかい。…じゃあ二人ともうちへ行こうか。疲れただろう？」

そう言っ、お婆ちゃんは歩きだした。

しばらくしてお婆ちゃんの家へつくと、お婆ちゃんは僕たちをソファへ座らせてミルクティーを出してくれた。甘くて優しい味のそれは、疲れや不安をどこかへ吹き飛ばしてくれた。

「さて、どうして二人は私のところへこようと思ったんだい？」

お婆ちゃんが僕たちの前に座ってそうたずねた。

「お婆ちゃんなら知ってるかと思っ。僕たちがキグルミを着ている理由を」

その言葉にお婆ちゃんはびっくりしたようだった。

「そうかい。そんなことを…。チルちゃんもたらした良い意味での変化だね」

そう言っ、優しく微笑んだ。

「なんで、この町の人間がキグルミを着ているかを話してあげようね。今理解出来なくても、二人ならきつと、いつか分かる時が来るよ」

ゆっくりと目を瞑ると、お婆ちゃんは静かに話し出した。

「簡単に言っ、キグルミは鎧なんだよ」

「鎧っ、おとぎ話の騎士とかが着てる？」

「そう。その鎧。私達のキグルミは自分の身を守るとい意味ではこれと同じものなんだよ」

「自分の身を守る？」

「自分の身というよりは、心をね。誰しも自分の心を守ろうとして何かしらの対策をとるものなんだよ」

「二人はまだまだ若いから分からないかもしれないね。でも、そのうち、潰れそうになる

くらい辛いことが沢山出てくるよ。そうすれば、今私の言ってることの意味も分かるようになるよ」

「そういうものなの？」

お婆ちゃんはクスリと笑った。

「そうだよ。外面を怖くしたり、他人に好まれるようにふるまって、傷つけられないようにするんだ。その方法は人それぞれで、誰一人同じ方法を使う人は居ない」

「キグルミと同じなんですね」

「そう。キグルミはその方法を表に出して、私たちはただそれを着ているだけなんだよ。たぶん、この町の人は外の人たちよりも弱くて幼いんだろうね。だから、傷つけられないように、キグルミを着て一生懸命自分を守っているんだよ」

「よく分からないや」

「ゆっくり分かっていけばいいんだよ。まだまだ先は長いんだから」

それにね、とお婆ちゃんはいたずらっ子のように微笑んだ。

「キグルミは弱い自分のことを守ってくれるもう一人の自分で、良き友人なんだよ。今はまだ、リノちゃんのキグルミは何も話してくれないかもしれないけど、いつかきっと、リノちゃんを助けてくれるようになるよ。私と私のキグルミは親友だしね」

その時、お婆ちゃんのキグルミの目がいたずら気に光った気がした。それに気がついた僕とチルは一瞬固まった。それから、ゆっくり息を吐き出したチルがお婆ちゃんにたずねた。

「ところで、リノのお婆ちゃんは、どうしてこの町の人がキグルミを着ているのか知ってたんですか？」

お婆ちゃんは少し困ったように笑った。

「リノちゃんと同じだよ。…私にも外から来た友達が居たんだ。その友達のおかげで、こ

の町で当たり前だと思っていたことに違和感を感じ始めた。でそれで、この町のキグルミのことを知っていそうな人を探して、話を聞いたんだよ」

「へえー」

「だからリノちゃん、チルちゃんを大事にしなきゃいけないよ。チルちゃん存在はきつと、リノちゃんにプラスになるはずだから」

「もちろんだよ！」

僕は大きく頷いた。お婆ちゃんは満足そうに笑っていた。

それから僕たちは世間話をして楽しく過ごした。お婆ちゃんが電話して、お母さんが迎えに来るまでの間。

帰り際、お婆ちゃんは「またおいで」と言ってくれた。

僕たちのこの時間は、他の人から見れば冒険と言えるほどのことではないのかもしれない。だけど、僕らにとっては冒険だった。キグルミをなぜ着ているのかという答えを持って帰って来れたのだから、成功したとも言える。僕とチルはキグルミの話を「二人だけの秘密だよ」と指きりをして約束した。答えという宝物は二人だけの秘密なんだ。それに、誰かに話したところで変な奴だなあとという目を向けられるだけだろう。だから二人だけの秘密。

僕たちは大きくなっていく過程で、この答えをちゃんと育てていかなきゃいけない。きっと、お婆ちゃんがそうしたように、僕がそうしたように、答えを探す人がこの先も現れるだろうから……

それに、いつかきつと、僕の狼のキグルミも僕に話しかけてくれるだろう。その時にはきつと、僕たちは親友になれると思うんだ。だから、僕は今もっているこの気持ちを大事に抱えて大人になろうと思う。僕の未来のためにも。